

## 書評

多賀須幸男 著

## 『医者たちの跫音——日本医家の苦労話——』

日本の消化器内視鏡学を中心に消化器病学の発展に大きく携わってこられた多賀須幸男さんが上梓された『医者たちの跫音 日本医家の苦労話』を紹介します。現在につながる現代の先輩医者たちとの著者の交流・交歓をふくんだ七篇の掌編よりなる。「近代人研究会」の同人誌『人物研究』に発表された六篇と2009年の『ミクروسコピア 26巻』に初出された「日本人は、なぜピロリ菌を発見できなかったのか」よりなる。ピロリ菌のエピソードは、著者の専門領域であり日本の得意な医学分野である【胃の学問】で日本の専門家皆見過ごしていたピロリ菌についての専門家としての反省と解説として大変に参考になる。

『人物研究』に初出した六篇は多賀須家の四代にわたる医者を紹介した「医者四代」を終篇としているが、評者はこの一篇から読み出した。浜名湖の新居における多賀須家の四代を彌久(1854-1927)勝丸(1878-1949)、正三(1878-1949)幸男(1930-)について、地域の医者 of 修行と実際を紹介されている。日本の近現代において、大急ぎで混乱を伴った近代国家となった日本の歴史の中で、どのようにして医を志す者が医者になり、翻弄されながら医療に携わってきたかが、先祖への愛をふくんだペーソスをもった文でつづられている。一家族の歴史としてではなく、日本の医療を担ってきた人の市井における生き方の普遍的なものが描かれており、医療史や医学教育史を学ぶものにとって貴重な一篇と思う。

そのほかの五篇については表題につづけてその生きた年代をあげて紹介する。

「志賀潔と乾馬翁の濾水器、細菌濾過器を巡る人々」志賀潔(1870-1957)、「藤波肉腫は生きていた一見直される藤波鑑の研究」藤波鑑(1870-1924)、「七条小次郎—血清を焼いて胃癌を診断した偉大な医学教育者」七条小次郎(1906-1987)、「岡治道—異色の東大病理学教授の生き方」岡治道(1891-1978)、「佐藤隆一の軌跡—実験用鼠「ドンリュウ」を育てた外科医」佐藤隆一(1920-1982)、「杉浦兼松—いちずな癌の薬の研究者」杉浦兼松(1889-1979)の各篇である。それぞれは表題が示す内容を中心に書かれているが、ここに採り上げられている人物像の描写が愛情深く述べられているだけでなく、それぞれの人物をめぐる同時代・異世代人との多くの交流が深みと広がりをもつて記述されている。またその時代についても、近現代史の中での社会と医学の関係がよくわかる形で描かれている。各篇について解説を加えることは評者の力の及ぶところではないが、本書で採りあげられているエピソードの中で評者にとって興味深かったことのいくつかを紹介して、この本を手にする方の増えることを期待したい。藤波鑑の篇によれば日本では継代の途絶えた藤波肉腫が、チェコスロバキアの癌研究所に保存されており花房秀三郎夫妻により癌遺伝子が確認されているとのことである。群馬大学医学部を育てた七條小次郎の篇は、戦後医学教育では全く触れられることもない七條反応の紹介とともに、七條の橋田邦彦への傾倒と医学と医術の批判が書かれている。抗癌剤の研究者として米国で先鞭をつけた杉浦兼松の篇では、彼の生存中に必ずしも十分な成果が上がらなかった癌化学療法が、いま最先端の医学研究の場となっている歴史を教えてくれる。杉浦の渡米の経緯やニューヨークでの学びの場が初代駐日アメリカ合衆国総領事タウンゼント・ハリスの開いた学校から始まることなどにも触れていることなど、司馬遼太郎の『街道をゆく・ニューヨーク散歩』も思い出しながら拝読した。

どの掌編にも著者の思いがこもったたくさんのエピソードが書きこまれている。採り上げられている医者たちが、必ずしも自分の好むように生き

ることの出来なかった時代に残した足跡がその後の時代に引き継がれていることを知ることは歴史を学ぶ者の楽しみである。その発音が聞こえてくるような気がする本である。多賀須幸男さんの研究に敬意を表し、本書を上梓されたことで『人物研究』の同人ではないものにも読む機会がいただけたことに感謝します。

(渡部 幹夫)

[考古堂書店, 〒951-8063 新潟市中央区古町通4番町563番地, TEL. 025 (229) 4058, 2012年11月, A5判, 217頁, 1,800円+税]

## 書籍紹介

### 財団法人日本国際医学協会 編 『黎明期の日本近代医学・薬学： 日独交流 150 周年記念出版』

日本国際医学協会が開催した2005年と2010年の国際治療談話会総会におけるシンポジウム・講演がまとめられ、日独交流150周年記念事業の一つとして出版された。英語タイトルはThe dawn of modern Japanese medicine and pharmaceuticals, ドイツ語タイトルはDie Morgendämmerung der Entwicklung der modernen japanischen Medizin und Pharmazieとなっている。第1部は日本語編で医学3章、薬学1章からなり、第2部は第1部と同内容の英語編である。非売品であるが、大学図書館等で閲覧可能であり、著者のウェブページで公開されている章もある。

#### 内 容

##### 第1部 日本語編

第1章 ヴォルフガング ミヒェル「近世から近代へ—初期日独交流における医学の諸相」

6

第2章 詫間武英「明治初期におけるドイツ医学導入の経過—相克と決断, 1869(明治2)年」

29

第3章 都築正和「ベルツ, スクリバによる日本医学育成と後世への影響」 38

第4章 山川浩司「日本の薬学研究・教育の黎明期とその影響」 53

##### 第2部 英語編

Cap.1 Wolfgang Michel, Glimpses of medicine in early Japanese-German intercourse 72

Cap.2 Takehide Takuma, Introduction of German medicine to Japan in the beginning of Meiji Era — severe way to decision in 1869 95

Cap.3 Masakazu Tsuzuki, The Introduction of Modern Medicine to Japan by Drs. Bälz and Scriba and Their Legacy 97

Cap.4 Koji Yamakawa, Research and education in pharmaceutical sciences in Japan: the dawn and influence 117

(澤井 直)

[日本国際医学協会, 〒154-0011 東京都世田谷区上馬1-15-3 MK三軒茶屋ビル3階, TEL. 03 (5486) 0601, 2012年1月, B5判, 132頁, 非売品]